



第32号

ECOMAIL



### 関西 ECOMAIL

関西支部会員のみなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々で、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員のみなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座

00990-5-37886)

## 第51回 ワークショップのお知らせ

日時 7月6日(土) 14:30~17:00

会場 大阪教育大学天王寺キャンパス

本館1階南側S4教室 (予定、当日会場内に掲示します)

(JR大阪環状線 寺田町駅下車、南出口を西へ徒歩3分)

話題提供者 植田善太郎 (泉大津市立条東小学校)

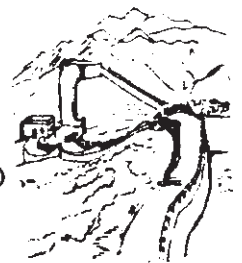
井田和子氏 (大阪女子大学)

村上幸子氏 (大阪市立住吉中学校) 他

テーマ 「日中共同環境教育シンポジウム報告」

今年3月14~16日に北京で行われた「日中共同環境教育シンポジウム」に参加した植田をはじめ、大阪から参加された井田氏、村上氏その他の方々より、感想とビデオ映写などを交えて報告をしてもらいます。

また、6年前に訪中教育視察に参加された本庄 眞氏が司会としてワークショップを盛り上げます。

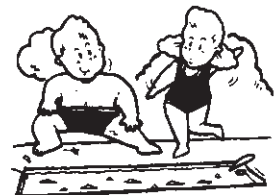


中国・万里の長城

ワークショップ後、同会場内にて世話人会を予定しています。

### 第32号 目次

- ・第49回 関西ワークショップ(4/20)報告  
「地域ぐるみの子育てネットワーク -こどもエコクラブと環境学習-」  
(原田 智代 「せいわエコクラブ」サポーター・大阪市天王寺区在住) 2~3
  - ・日本環境教育学会 関西支部 協力事業  
「すいた環境教育フェア'96」(6/8)より ...4~6
  - ・第50回 関西ワークショップ(6/15)「環境問題、環境倫理、環境教育」  
(アントロピー学会関西セミナーと共催) 参加者の感想 ...7
  - ・ネットワーク ...3,6,8
- \*連載企画<阪神・淡路発!被災地は今>は都合により休ませていただきます。



**地域についてもっと知らなくっちゃ！**

わたしたちが活動する地域は、行政的な区割りでは大阪市天王寺区の聖和小学校校区内ですが、地理的には上町台地の南北のほぼ中央を東に下ったあたりです。校区は四天王寺に接し、校区内には国分寺跡と思われる国分町、難波の大道（なにわのおおじ）からの由来からであろう大道（だいどう）という町、大阪市では一番早く人が住み着いたと考えられている勝山地区（天王寺区と生野区にまたがっている）がある歴史の古い町です。しかし、住民のどれほどが、この歴史であるとか上町台地の風土について関心をもっているかといえば、はなはだ少ないと言わざるをえません。

わたしたちの子供会が所属する天王寺区子供会育成連合協議会では、18年前から「史跡めぐり」という行事を毎年行っています。お寺などをポイント的に回って行くことが多かったのですが、1994年の「史跡めぐり」では、上町台地の西側の急斜面を観察する企画を立てました。その時に参加した、観察地点が含まれる校区の小学校5・6年生や中学生に、この斜面の由来を知っていたかと尋ねたところ、全員が「知らなかった」と答えました。たぶん古代の大阪のようすなど、学校で習っていると思うのですが、教材が作られる最小範囲は大阪市までで、居住している地域に結びつけての地理や歴史を学ぶ機会が欠落していることを思い知らされました。このような学習は、学校のみで行うものではなく、本来、家庭で、おじいさん、おばあさんから昔の町のように暮らしについて話してもらうなどして、地域内で子・孫の代に語り継がれていくものです。しかし、急変する都市環境の中で、住民の移動があったり、家族構成自体も変わり、町の昔のようすを話し合う場がないのが現状です。住民が自分の住む地域のことをもっと知って地域の特色にそったまちづくりをしていくことが大切だと思うのですが、そのためには、子どもから大人まで、地域の住民の多くが自分たちの地域に関心をもつことが不可欠です。

住民が自主的にコミュニケーションの場を作っている活動は、子供会や町会の活動などがあり、それらは何十年という長い活動の歴史をもっています。これらの活動から、住民意識や人と人とのふれあいの大切さが学んでいると思います。このような活動があってこそ住民として地域の在り方について語れる場ができるのだと思います。ただ、これらの活動は、毎年同じ取り組みがなされていることが多く、これまでの町環境がこれからも続くという前提でなされていると思います。子どもの状況や町を取り巻くより大きな環境の変化などを視野に入れた活動の展開が必要だと思うのです。そのためには、子どもから大人までの地域住民への環境学習の場の提供が必要です。昨年、子供会の一クラブとして発足したエコクラブが、地域環境の情報発信を始めました。これも一つの地域住民対象の環境学習の形態だと思いますので活動内容や活動をスムーズに行うための工夫や課題など次に紹介したいと思います。

**せいわエコクラブの活動**

エコクラブ活動を始めたきっかけは、昨年環境庁からの「こどもエコクラブ登録」への呼びかけです。こどもエコクラブは子どもが行う活動ですが、それを支援していくサポーターが必要です。日常的に活動をするためには、代表サポーターが把握できる範囲のメンバー数に限られてきますので、広く参加を呼びかけるわけにはいきません。当然、野外活動が多いクラブですし、地域外での調査や学習には数人の協力してくれるサポーターが必要です。そしてもちろん主役の子どもたち。このような条件に合ったのが、区の保健所主催の「環境教室」にいっきと参加していた子どもたちと保護者です。原田や呼びかけた子どもたちの保護者が子供会のお世話役をしていたということがあって、自然に子供会の一クラブとして活動が始まりました。子供会の地域リーダー（ジュニアリーダー）

の子供たちもメンバーに加え、活動目標を決めました。区の史跡めぐりのための資料づくりにジュニアリーダーが参加していたこともあり、「地域の史跡を調べること」「緑を守る活動」が子どもの案としてでてきました。地域のことを調べたら、新聞にしてみんなに知らせることも話し合いの中から自然にでてきました。阪神・淡路大震災の地域での被害調査から取り組みはじめ、これまで2回新聞を発行しました。できた新聞は、小学校の全児童に配布し、回覧板で地域にも回しました。

### スムーズな活動のために

せいわエコクラブの新聞づくりやその配布が、小学校や町会の協力を得てスムーズにいったのは、これまでの子供会の組織と活動の実績があったからだと思います。子供会でエコクラブの活動を行うと、傷害保険のシステムを安価に利用できたり、活動費用も子供会の活動費から支出できるというメリットがあります。しかし、一番の利点は、「これまでの子どもの育成の場としてのスポーツや文化発表に加え、地域学習（環境学習）が育成の場として重要である」ということが大人の育成者に認識されるチャンスとなることではないかと考えています。今後、多くのクラブが活発な活動を展開されていくと思いますが、できればこれまでの「子育て組織」（学校、PTA、子供会など）とネットワークを作っていきながら活動していく方が、地域住民へのインパクトが強いと思います。はじめに書きましたが、地域住民の緻密なコミュニケーションなしには、環境は改善されていかないからです。

また、環境学習には、専門家のアドバイスが必要です。天王寺区内には、大阪市立環境科学研究所があり、区の保健所との協力で環境教育の取り組みがなされています。せいわエコクラブのメンバーの環境問題への関心は、ここでの学習から始まっています。環境学習が様々な場で取り組みだされていますので、環境学習を推進している組織と連携をとっていくことも大切だと思います。

### 子どもたちの交流も大切

環境問題について知っていくと、子どもでも悲観的になることがあります。個人でも社会全体でもライフスタイルを変えていくことは、非常に難しいからです。純真な心で環境問題に取り組む子どもたちにとって、環境保全を願う者が少数派であるということは、とてもつらいことです。何よりも自分たちが大人になった時の社会に希望がもてないのですから。せいわエコクラブは、幸運にも3月の「こどもエコクラブ全国フェスティバル」に参加することができました。メンバーの一人は、ここで、活発に活動している仲間の様子を知り、「全国でみんながんばっていると知ったばかりは、地球、いやぼくたちの未来もそんなに暗くはないと思いました。友だちもでき、地球のことも分かった。エコクラブをやっていて本当によかった！」と作文中に書いていました。環境学習に関わっている私たち大人の交流だけでなく、子どもたちの交流も大切な時期にきているのではないのでしょうか。

## ネットワーク

### ◆ 日本野鳥の会

定例探鳥会

箕面公園探鳥会

〈日時〉 ~~6月2日(日)~~ 8:30~

7月7日(日) # (清掃探鳥会)

〈集合〉 阪急箕面駅前 8:30

〈担当〉 吉村理一 0727-23-2651

堺・鉢ヶ森探鳥会

〈日時〉 ~~6月2日(日)~~ 9:15~

7月7日(日) # (清掃探鳥会)

〈集合〉 泉北高速鉄道泉ヶ丘駅センター

ビル噴水前 9:15

〈担当〉 清水俊雄 0722-99-1779

万博公園探鳥会

〈日時〉 ~~6月8日(日)~~ 9:15~

7月13日(土) #

〈集合〉 万博公園太陽の塔前 9:15(大阪

モノレール万博記念公園駅下車)

〈担当〉 平 軍二 06-877-0648

服部緑地探鳥会

〈日時〉 ~~6月8日(日)~~ 9:15~

7月13日(土) #

〈集合〉 北大阪急行(地下鉄御堂筋線)服

部緑地公園駅西出口改札前 9:00

〈担当〉 井上裕子 06-841-3661

# 「すいた環境教育フェア'96」に 関西支部協力参加

1994年より環境庁が推進している環境教育シンポジウムの本年度地域事業として、6月8日に標記の事業が開催された。この事業推進のために、日本環境教育学会では各地におけるシンポジウム開催等を側面的に支援してきたが、このたび関西支部では、自治体が主催する地域における環境教育推進事業に積極的に協力参加して、その発展を支援した。この種の活動は関西支部としては初めての試みであり、開催に至るまでには参加の可否等について世話人会の議論を重ね、多少の紆余曲折があったが、支部会員とその関係団体の積極的な協力と吹田市関係者の熱意により、多数の市民と支部学会員が参加して目的を達成することができた。

今回の協力参加内容の第1部(午前)は、「市民・事業者・学校・行政が共に手をたずさえた取り組みを」という主題に沿って、3つの事例発表ワークショップ(別記)を実施した。また各会場とも発表・進行・まとめに関西支部支部世話人が協力した。参加内容の第2部(午後)にはシンポジウムが行われた。古沢広祐さん(国学院大学)による基調講演(別記)に続いて、本学会の鈴木善次さん(大阪教育大学)がコーディネーターとなってパネルディスカッションが行われた。この討論には関西支部会員の植田善太郎さんと高畠耕一郎さんがパネリストとして参加した。

本号ではそれぞれの協力内容の概要を掲載したが、この事業に対する関西支部としての総括はまだ行われていない。しかし環境教育学会が環境教育促進のために地域の自治体や事業団体とどうかかわったらよいか、その方法や意義等を検討するための多くの手がかかりが今回の協力事業によって得られたと思う。次号までにより十分な議論を行って支部会員の皆さんに公表し、もっと多様な視点からの意見をいただきたいと思う。

(文責 赤尾)

## 取り組み事例発表ワークショップ

### ①「市民 事業者・学校・行政とのパートナーシップ」

#### 事例①：宝塚ヒューマン&ネイチャーフォーラム実行委員会の取り組み

松本郁子(GEC)

### ②：奈良地域における調査・環境学習の取り組み

本庄 眞(日本環境教育学会 関西支部)

### ③：吹田市の環境副読本に関する取り組み

黒瀬 哲也(吹田市教育委員会)

最初は、宝塚ヒューマン&ネイチャーフォーラム実行委員会主催のタウンウォッチング及びそこから子ども環境会議につながる一連の取り組みをスライドを交えて発表されました。

実行委員会そのものが、市民団体や行政・企業などで構成されており、地域作りのパートナーシップの第一歩と言える内容でした。次の発表は、奈良環境教育研究会の5年間の活動の報告で、毎月1回の例会の多彩な内容及び発表者から、ネットワークが構築されており、且つ5年の歩みの中で、奈良らしい地域性の取り組みの模索など発展しつつある状況がうかがえる発表でした。3番目は、環境教育の副読本についての発表で、内容は作成に至る経緯や編集方針など創る過程がよくわかるものでした。

これらの各立場での発表を中心に、質疑応答の他予定時間を越えて様々な意見交換がなされました。

## ②「ビオトープとまちづくり」

生きものと共生するまちづくりの手掛かりとして今注目されているものは、公園や学校のような公共的空間の緑化である。それも緑を増やすだけではなく市民や子供が、野鳥やトンボのような街にも住める野生生物と共生することができるような公園や学校がイメージされる。このような場所をまちのビオトープと呼ぶことにして、(生態学的には問題があるが)公園づくりの立場や学校園の視点から事例発表が行われた。

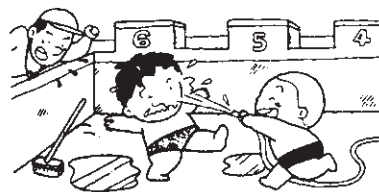
公園のビオトープについて神戸市エコ・アップ研究会代表の高畑正さんは、公園内でのトンボ池の造成やホタルの放流について、実際の技術を豊富なスライド映像によって解説した。またこれらが子供や市民にどう利用されているのか、トンボ祭りやホタルの夕べなどソフト面についても紹介された。そして最近では、公園と学校と河川を一体化した「学校公園」づくりを手掛けているという、示唆に富んだ話もあった。

関西支部会員の谷村載美さんは、大阪市内小学校の理科学習・教材園の調査研究に基づいて校内の樹木園や野草園の現状を示し、校庭美化から学校園ビオトープまでさまざまな学校園の姿をスライド映写で紹介した。同時にこれらが教科指導と連携した事例や校区の野草マップづくりなど、地域社会へのひろがりについても事例紹介があった。またこのような学校運営と行政側の施策とのギャップを埋めることが、今後の学校におけるビオトープづくりの課題となることが指摘された。

フロアからも活発な発言があり、特に地元の吹田自然観察会を主宰する高畠耕一郎さん(関西支部会員)は、市内にある紫金山公園の総合公園10ヶ年計画について、生きものの豊富な自然のままを残すべきだという市民の思いを話した。これに対して行政サイドからも都市公園に関する現行制度や諸システム改善の必要性が述べられた。

## ③「社会の仕組みとライフスタイルの変革」

この分科会の内容については、次号33号に掲載します。



## シンポジウムの概要

シンポジウムは古沢広祐さんの基調講演で始まった。冒頭、宇宙から眺めた地球の姿がスクリーン一杯に映しだされて、会場は「かぎりある地球環境の中で生きる」というテーマの雰囲気に取り込まれた。まず人口問題・エネルギー問題・情報文明の行方・野生生物種の減少など、ショッキングな人類の歩みについて認識を新たにしたいうえで、南北間の較差・世代間の較差・人間と自然の較差など、世界の中の日本人の消費生活をタタキ台にして反省がうながされた。そして大量消費型経済社会に甘んじている現在の生き方からグリーンコンシューマーになるために、新しい価値観をもった行動計画によって実践をする分かりやすい事例が示された。

パネルディスカッションは「新しいライフスタイルとパートナーシップの形成」をテーマにして行われた。始めに、今年環境庁の環境保全テーマがパートナーシップであることという、コーディネーター鈴木善次さんの討論に対する方向づけがあった。パネリストは本学会会員として植田善太郎さんと高畠耕一郎さんがそれぞれの立場で参加した。

植田さんは教師の立場から、環境教育学会という場を通して小・中学校と高等学校のネットワークを全国的に築いてきた経緯や、教科（ヨコ系）と校種（タテ系）との連携、学校と地域社会（PTA）のかかわり方など、教育分野でのパートナーシップのノウハウを披露した。また高畠さんは吹田自然観察会を主宰する住民として、地元の都市公園（紫金山公園）の整備計画に郷土種を復元したいという市民の思いを訴え、市民と行政のパートナーシップの必要性を強調した。パネルディスカッションにも参加した古沢さんは最後に、ネットワークにしろパートナーシップにしろそこから見えてくる価値の共有を、例えば生きものマップや歴史地図、まちのビジョンデザインなどにして、情報発信の輪を広げることが21世紀のパートナーシップの課題ではなからうかと結んだ。

### ◆ 自然史博物館の自然観察会 水草

水草は、水の中で生活するためのいろいろな仕掛けをもっています。本来は陸上で生活するはずの高等植物が、どんな工夫で水中生活を営んでいるかを観察します。また難しい水草の種類の見分け方にも挑戦してみましょう。

- 〈日時〉 7月13日(土)  
〈場所〉 京都市内  
〈定員〉 50名(定員を超えた場合は抽選)  
〈対象〉 中学生以上(学校のクラブなど団体による参加はできません)  
〈申込先〉 往復はがきに「水草」参加希望と明記し、希望者全員の住所、氏名、年令、電話番号、返信用の宛名を書いて、6月25日までに届くよう申し込んで下さい。  
抽選の結果や参加方法は返信用はがきでお知らせします。

ネットワーク

### 湖岸の植物

琵琶湖有数の大河川「安曇川」の河口部は広大なデルタ地形を形成しています。ここでは、湖畔林や原野、湧水の多い水路など、豊かな水辺の自然に触れることができます。安曇川デルタを訪ねて湖岸の植物を観察します。

- 〈日時〉 7月14日(日)  
〈場所〉 滋賀県高島郡安曇川デルタ付近  
〈定員〉 50名(定員を超えた場合は抽選)  
〈対象〉 小学生以上(小学生には保護者同伴での参加が必要です)  
〈申込法〉 往復はがきに「湖岸の植物」参加希望・希望者全員の住所、氏名、年令、電話番号、返信用の宛名を書いて、6月25日までに届くよう申し込んで下さい。団体での申込みはできません。

※遠方ですが、JR大阪駅8:30頃の列車で現地集合できます。

# 第50回 関西ワークショップ(6/15)「環境問題、環境倫理、環境教育」(エントロピー学会関西セミナーと共催) 参加者の感想

天野雅夫(甲南大学・研究生)

6月15日、関西支部とエントロピー学会関西セミナーの合同シンポジウムが、大阪府中小企業文化会館にて開催されました。シンポジウムは、共に大阪教育大学の鈴木善次氏(環境科学教育)と山内友三郎氏(倫理学)がパネリストとして発表し、柴谷篤弘氏(京都精華大学前学長)がコーディネーターとして、環境問題、環境倫理、環境教育という不可分ではありながら、異なった三つの領域を、一方ではエントロピー学会の立場から、また他方では環境教育学会の立場を考慮した上でまとめられました。以下、このシンポジウムの内容と、感想を述べたいと思います。

最初の発表は、山内氏が環境倫理の現状について、シンガー等の功利主義的倫理学の立場から述べられました。氏は現在の人間について、それが“man apart from Nature”という状況であり、これによって環境問題等の自然破壊が起こっており、この状況から抜け出すためには、本来の人間の姿である“man a part of Nature”に戻らなければならないと主張されました。また、「生き方」の問題について、現状の生き方よりも「よりよい生き方」が存在するはずであり、それに向かって努力していくことが現在の人間社会に求められていることであると述べられました。具体的には、市民がその生活や商品の良否を決定する「判断力」を持つことが必要であるとされました。

次の発表は、鈴木氏が環境問題と密接に関連した環境教育の問題を、現状について考察し、その方向性について検討されました。氏は環境の問題がなぜ発生するか、環境教育がなぜ必要なのかということ「科学文明の問題」という視点から捉え、環境問題の解決のためには、環境教育による「自己の意志を決定する能力を持つ市民を育てる教育」が今最も求められているものであると主張されました。また、実際の教育現場では「判断のできる子どもを育てる教育」が求められ、そのために、「循環」や「システム」に対する視点を持った教育が必要であると述べられました。

続いて芝谷氏がコーディネーターとして発表されました。氏は「環境倫理も環境教育も現状としては成功していない」と現在の厳しい状況を指摘しながら、「判断力を持った市民の集団をつくる教育」が必要であるという点で、先の両氏の発表と方向性は同じであるとされました。しかし、それと同時に、上記のような教育の難しさ、あるいは「共生」の困難さを述べられました。

シンポジウムの終盤は会場からの質疑応答でした。出席者の中からは、お互いの学問的用語の相違から、多少の誤解が生じたようでしたが、いくつかの質問は「教育」や「倫理」ということについての重要な問題を提起していました。例えば、関西支部のS氏は実際の教育現場では「解答では良いことを書いていても、それを実行することがない」というように、「教育」と「生き方」の分離が生じているという点を指摘しながら、教育における「目的」の問題を指摘されました。また、エントロピー学会のS氏は、環境倫理学が「環境ファシズム」という言葉にみられるように、過去の全体主義的な思想に近づくのではないかと問題を指摘されました。

以上のように、シンポジウム全体としては、共催シンポジウムとしては1回目であったためか、表面的には二つの学会の考え方の違いを強く認識させられる結果となりました。しかし、異なった主旨をもつ学会でありながらも、最終的な方向性はそれほど隔たったものではなく、共通した問題点を持つなど、今後の双方の学会の交流に大きな期待を感じました。また、鈴木氏や山内氏がおっしゃるように、環境教育も環境倫理も教育や倫理の本来の必要性から生じたものであり、「教育のあるべき姿」「倫理のあるべき姿」を考察するという意味では、今回のような異なった学問領域の交流がもっと必要であり、またそれによってこそ「環境教育」や「環境倫理学」のより一層の充実が望めるのではないかと感じました。

◆ 兵庫県立人と自然の博物館

ネットワーク

環境リテラシーをどうつくるか  
 〈日時〉 7月5日(金)14:00~16:00  
 6日(土)10:00~16:00  
 〈講師〉 博物館環境計画研究部研究員  
 〈会場〉 博物館内セミナー室  
 〈対象〉 一般成人  
 〈申込問合せ〉兵庫県立人と自然の博物館  
 普及課 0795-59-2002  
 FAX 0795-59-2007 〒669-12  
 三田市弥生ガ丘6

〈参加費〉無料、但し博物館入館料が必要  
 〈申込法〉往復はがきに「講座・テーマ名」  
 を明記し、申込者の住所、氏名、  
 年齢、性別、電話番号及び返信  
 用はがきに宛名を書いて開催日  
 の5日前に届くようお申し込み  
 下さい。  
 尚、各講座の応募状況等につい  
 ては電話でお問い合わせ下さい。

講師陣紹介

市川 智史 (鳴門教育大学)	「環境教育の潮流」
八木 剛 (人と自然の博物館)	「博物館と環境教育」
牛尾 功 (川西市教育委員会)	「地域を舞台にした環境学習システムづくり」
八尾 哲史 (箕面市環境保全課)	「市民と行政のパートナーシップによる快適環境づくり」
小川 雅由 (西宮市環境保全課)	「市民主導の学習システムづくり」
近藤隆二郎 (和歌山大学)	「ミニ博物館の館長と地域」
芦田 英樹 (豊中市政策推進部)	「人・まち・しくみ・まちづくり」

ユースサービス大阪主催 交流サロン事業

「市民教育の装置としての環境教育」

一人権教育のまなざしから手法の整理と発展の可能性一

〈日時〉 7月9日 (火) 19:00~21:00

〈場所〉 ユースサービス大阪 1階情報センター

〈講師〉 高田 研氏 (日本環境教育フォーラム 主任研究員)

参加者募集中

「指導者のための環境教育ワークショップ」

〈とき〉 平成8年9月15日(日)~28日(土) 14日間

〈行き先〉 ニュージャージー州、ニューヨーク州、カリフォルニア州

〈定員〉 15人 (先着順)

〈参費〉 32万円



以上の問い合わせは

ユースサービス大阪 ☎06-942-5146 FAX06-942-2448

関西E COMAIL

第32号 1996年6月28日発行

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室)気付

☎582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1 (☎&FAX 0729-78-3381[直通])

次回 第33号 1996年8月26日発行予定 原稿必着期限8月20日

(原稿は広報委員の植田善太郎まで、直接郵送かFAXしていただいてもけっこうです)

☎592 堺市浜寺石津町東2-3-35 ☎&FAX: 0722-47-2751)